

---

# 魔法少女リリカルなのは～目指せデバイスマスター～

叢真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～目指せデバイスマスター～

### 【NZコード】

NZ827L

### 【作者名】

叢真

### 【あらすじ】

何故かリリカルなのはの世界に転生してしまった主人公。原作なんか知らないが自身の夢に向かつて突き進め。『デバイスってネタの宝庫だよね?』

原作になるべく準拠する予定ですが、ご不快に思われる方はブラウザのを押すなり、携帯の戻るキーを押すなりをお勧めいたします。

## 第1話　一度目の人生はじめました（前書き）

他の作者たちの小説に影響され自身の小説書いて見ました。

文才が足らず都合主義などもありますでしょうが宜しくお願いします。

## 第1話　一度目の人生はじめました

あ、ありのままに今起こつた事を話すぜ！　いつも通り部屋で寝ていて目を覚ますと赤ん坊になつていたぜ！　夢や幻覚なんてちやちなもんじやねえ転生の真髓を味わつたぜ。

はい、2次創作で良くある転生ですね分かります……つて

「おおやああああー？（なんですかあああー？）」

### 第1話

じうしょ監視さんおは」じんばんこひわ。

何故か転生してしまい叫んでいたのがそろそろ懐かしくなります。

リアルコン君体験中のレザード・ワインストンです。

第一の人生を歩み始め明日で4年たつ、精神年齢は三十路に突入しました……。

どうやら俺が転生？した世界はリリカルな世界らしいんだが原作なんぞ殆ど知らない。

前世？ではプチオタクであつたもののリリなのは全く見てなかつ

た。

まあ、友達に色々聞いてはいたがストーリー何かぜんぜん覚えておりませんし。

そもそも「おい、聞いているのかレドー」

毎度毎度、人の思考を遮るなこには…

「「」めん聞いたなかつた。なに、ミニクロ?」

今、俺…レドって言つのは俺の愛称…の事呼んだのは幼馴染のクロノ・ハラオウ…因みに同じ年で4歳。

同じ年の癖に俺よりかなりちびっ子いので親愛の情をこめて偶にミニクロと呼んでいる。

だって何かマイクロに語呂が似てるじゃん?…髪の毛も黒いし。

「クロノだ!…」

「はいはい、んで。何の話?」

ミニクロつて言つと毎回訂正してくるんだがそんなに嫌なんだろうか?

結構可愛いと思つんだが……

「大きくなつたら何になりたい?」って話。」

「う~ん、取りあえずは父さんみたいなデバイスマイスター。」

レガード・ワインストン、ミッドチルダ式総合Bランクの魔導師で執務官補佐兼A級デバイスマイスター。  
それが俺の白慢の父さん。

魔導師としてはたいした事は無いが技術者としては超がつくほどの一  
流で俺の憧れだ。

デバイスって色々とネタに使えそしだし是非ともなりたい職種で  
ある。

因みに母さんは、ライラ・ワインストン、古代ベルカ式空戦ランクの魔導師で執務官。

真紅の戦乙女とか管理局の赤い彗星とか呼ばれてる。  
…へ、白い悪魔？

何かへんな電波を受信したがスルーする。

「そうこうクロノはどうなのさ？」

「僕は父さんや母さんのように立派な提督になつて管理局で次元世界の平和を守るんだ」

「どうだす」いだろと言わんばかりに胸を張る。

クロノのお父さん、クライド・ハラオウンさんは俺の両親の上司で友達で、次元航行艦の艦長。

「ああ～す」「こす」「こ

「そらだりす」「こだり

適当にほめたら更に上機嫌になる。

「あ、互に夢の為にがんばりや」

「な、ひ、ひちひが早く夢を叶えるか競争だぞ！」

ふふ、そんな分の悪い賭けを持ち出して良いのか？「クロ？」  
俺が図指すのはバイスマイスターでお前が図指すのは提督だぞ？

「競争するだけじゃ面白くないから向か賭けよつ

わあ、乗つて来い。

「な、う、負けた方が勝った方の図つ事をひとつだけ聞くんだ」

くつくつく、良いだろ？

俺の勝利は揺るがないがな。

「うん、それで良いよ」

「つこつ笑顔で答える。

今之内からここに何をやひせるか考えておいろ…

「クロノ、レッド。匂い飯の用意できたわよ？」

もう言つてドアから顔を覗かせるのは緑色の髪で額に印をもつね  
ば…じやなくてお姉さん。

「レッド君、今何か失礼な」と考へなかつた「ソソナコトナイデス

「『 リンディさん … セツ、ならよろしく』」

「 」の人はリンディ・ハラオウンさん。クロノのお母様で仕事で家を空けがちな両親に代わってよく面倒を見てくれてる。

何故かちょくちょく俺の思考が読まれている気がするのは気がせいだと願いたい。

因みにだが俺の両親、クロノのお父さんは揃つて一週間前から出張中。

というわけで俺は一週間前からハラオウン家で生活中なのだ。

「 それじゃ、二人ともご飯にしましょ 」

リンディイさんとつれられて部屋を出て行く。

一度目の人生、まだ始まつたばかりだけど俺は幸せだ。

## 第1話　一度目の人生はじめました（後書き）

自身の妄想がとまらず気がつけば書いちやいました。  
なのはとかの幼馴染は多いですが主人公はクロノの幼馴染にしてみました。

非才ではありますが完結できるようがんばって生きたいと思います。

誤字脱字、感想、アドバイス等ございましたら宜しくお願ひします。  
5／26　主人公の年齢を変更しました。　時系列的におかしか  
つたので

## 第2話 残されるもの達（前書き）

はい、第2話です。

ちょっと駆け足気味となりますが早いところ原作介入したいので一寸飛ばします。

## 第2話 残されるもの達

その連絡を受けたとき俺とクロノ、リンクティヤさんは楽しい夕食の最中だつた。

モニターの画面に移るのはグレアムおじさんで内容は至極単純。

…俺の両親とクライドさんが死んだ。

一瞬グレアムおじさんが何を言つてゐるのか理解できなかつた。

グレアムおじさんとコンティヤさんが何か話していたが俺の脳はそれらをノイズとしか認識しない。

…死んだ?  
そうだよ

…誰が?

俺の両親が

…嘘だ  
真実だ

自身がそれを理解すると同時に俺の意識は落ちた。

## 第2話 残されたもの達

俺が目を覚ましたのはそれから一週間後で病院のベッドの上だつた。

担当医が言つたのは心的ショックで眠り続けていたらしい。

取りあえずリンディさんには田茶田茶泣かれました。

葬式などの手続きはすべてグレアムおじさんが行なつてくれていた。

「…ただいま」

もう少し入院していた方が良いと言われたが半ば無理やりに退院して自分の家に帰ってきた。

分かつていていたことだけど誰も迎えてくれる人などは居ない。改めて実感してしまうと心が軋んだ

人気のない廊下を進み階段を上ると突き当たりの部屋に入る。

中には様々なパーツの置かれた台と中央には作業代と端末。父さんの仕事部屋だ。

もつともつと教えて欲しい事があった。

父さんの作業している姿がすごくかっこ良かつた。

デバイスについて話すときの父さんは子供みたいだつたけど輝いていた。

深夜まで父さんとデバイスについて話していく母さんに怒られる。

でも母さんの顔は怒りよりもしょ「うがないなあとこつ苦笑いで…

### 『ピンポーン』

来客を知らせるインターフォンにあわてて玄関まで下りる。ドアを開けばリンディイさんとグレアムおじさんが立っていた。

リビングに通じて来客用のソファーに座る。

「あ、お茶入れてきますね」

「いや、気にしないでくれたまえ。今日は君に渡す物があつてね」

「せうよ、お茶なら私が用意するからレジ君は座っていて頂戴」

キッチンに向かおうとしたらグレアムおじさんは止められた  
イさんに仕事をとられた

「あれ、せう言えばクロノは?」

今更ながらにクロノが居ないことに気づいた。  
リンディイさんが居るからあいつ一人で留守番なんてさせないと思  
うんだけど…

「ああ、彼はロッテとアリアにお願いして面倒を見てもうっている  
よ」

ああ、あの二人か…何度かあった事が在るけど玩具にされた記憶  
しかない。

「御愁傷様、クロノ」

骨は俺が拾つてやるからな。  
精々遊ばれていろ。

「でだ、今日来たのは君に渡す物が在る」

渡す物？  
なんだろ

「レガード君とライラ君から預かつた物を」

「父さんと母さんから？」

グレアムおじさんが取り出しその小さな箱だった。

「開けて見なさい」

箱を開けると中には青い宝石

「これはデバイス？」

「うむ、詳しいことは彼女に聞くと良い」

「彼女？」

『はじめましてマスター・レガード』

「君は?」

『私は試作総合兵装型インテリジョン・バイス。開発コード【アーカイバ】です。マイスター・レガードによつて製作されました』

「父ちゃんのー?」

『はい、詳しい事はマイスター・レガードよりメッセージをお預かりしています。再生いたしますか?』

「ああ、頼む」

数回【アガ点滅すると【アーカイバ】から空間ディスプレイが投影された。

しばらく砂嵐が続き画面が落ち着くと

「父ちゃんのー?」

セリフは両親が映つていた。

『レガード、この映像を見ているところとは無事に彼女は届いたのね?』

『誕生日おめでとう』

「誕生日?」

…やつ言えば忘れてたけど俺4歳になつたんだつけ?

『本当なら直接渡したかったんだが申し訳ない事に仕事が忙しくてね。リンクティに渡すよつに願いして誕生日当口に届くよつにせてもらつたよ。』

『パーティーは私たちが帰つたらすごいのを開くから楽しみにしていてね?』

『さて、彼女【アーカイバ】なんだがレドのデバイスだ。とはいえて機状態のみで魔法も基本的なものしか登録していない』

『あなたは将来デバイスマスターになりたがつていたからあえてこういうデバイスにしたわ』

『【アーカイバ】は待機状態のみしか搭載しない分、高度な処理能力と膨大な保存容量を誇る少々特殊なデバイスだ』

ふむ、良く分からぬ。  
もつと簡単に説明してくれ

『まあ、簡単に言えばデバイスのコアのみで四 元ポケットみたいな物よ』

なるほどね。

だから【アーカイバ（倉庫）】なのか

『分からない事があれば【アーカイバ】に聞いてくれれば良い』

『じゃあ、レド早く帰るからいい子で待つていてね?』

『あと、【アーカイバ】に名前をつけてくれると嬉しい』

へ？【アーカイバ】って名前じゃないの？

『【アーカイバ】はあくまで開発コードだからね』

名前ね…何がいいかな

『私たちが帰るまでに名前をつけておくのよ～』

『レード、改めて誕生日おめでとう。』

父ちゃんの言葉を最後に画面は再び砂嵐へと戻った。

『以上がマイスター・レガードからのメッセージです』

空間ディスプレイを閉じると【アーカイバ】が話し出す。

「おひ、ありがとうな。」

なんとこうか嬉しかった。

「それでだが、レザード君。君の今後の生活だがどうするかね？」

「そうだ、リンクディ君とも話したのだが君には身よりも無いし良ければ私がリンクディ君が引き取りたいんだが…」

「それあなたに選んでもらおうって話になつてね

リンディさんがお茶を持つて帰つてきた。

「俺としては別にこゝで一人暮「ダメよ」…」

俺の言葉を遮つてリンディさんがすばらしい笑顔で却下してくる。  
一人の方が楽何だけどなあ…

「嫌でも一人「ダメです」…」

負けないもん

「一人「ダメ」…」

ま、負けないもん！！！

「ひと「選びなさい」…」

まけな…

「ひ「私とグレアム提督どちらが良いかしら?」…グレアムおじさんでお願いします」

ま、負けた…。」

「ふむ、では私が保護責任者、リンディ君が後見人ということとい  
いかな?」

グレアムおじさんが苦笑いしながら尋ねてくる。  
ちくしょうちよつとは助けてくれてもいいじゃないかよ。

リンチャさんは自分が選ばれると思つていていたひじく驚き顔。

因みにグレアムおじさんを選んだ理由はリンチャさんが時折田茶  
田茶怖いから。

「はい、それで願いします

「ああ、直しくお願こかるよハザード君」

やうに手を差し出すおじさん。

「はい、あなたねがいします

俺も手を差し出して握手。

おじさんの手は「ひつひつ」とても暖かかった。  
その隣でリンチャさんが若干悔しそうにしていたのは気にしない  
…気にしないつたり気にしないの…

いつもして俺はグレアムおじさんのトド生活する事になった。

その後、燃えぬきたクロノがロットセラとアコアセラに連れて來  
られていた。

そのまま我が家での夕飯となつた。

で、今現在俺は自室で悩んでいる。

「なあ、【アーカイバ】」

『はい、マスター・レザー』

【アーカイバ】の名前についてだ。

さすがに「お前はどんな名前が良い?」なんて聞けないのでどうした物かと考える。

「お前の性能つて結局何が出来るの?」

『それは私の使用方法などについてでよろしくどうが?』

「うん、それで良いや。分かりやすく教えてくれると助かる」

『かしこまりました。まず、私自身の性能ですが私には待機状態しかありませんがバリアジャケット等の補助魔法の行使は可能です。インテリジェントタイプのブーストデバイスだと考えていただければ助かります』

「なるほど」

『マイスター・レガードは私を司令核とし複数のデバイスを使用する事を目的としていたようです。』

「ようするにお前がいくつかのデバイスを管理して戦況に応じてデバイスを変更して戦うと?」

『はい、その通りです。』

面白いな。

確かにこの方法なら戦略の幅がグンと広がる。

『現在私が管理しているデバイスは、非人格搭載型アームドデバイスの【ヴァイサーク】のみとなります。』

「ヴァイサーク？」

まさかどこのロボット大戦に出でくるアレか？

『はい、近距離戦対応の騎士剣であり。斬撃、刺突、打撃魔法に優れています。カートリッジはシリンドータイプ。装填弾数六発ですが製作者はマイスター・レガードですが発案者はライラ様で彼女のアームドデバイス【ヴァルキリー】を元に製作されました。』

…恐るべきマイファザー。

まさか父さんも転生者だつたりして……まさかね。  
まあ、それならそれでこいつの名前は決まったな。

「よし、決まった」

『なにがでしょうか？ マスター・レガード』

「お前の名前は【ラミア】だ」

『了解しました現時刻を持つて私の名称は【ラミア】とします。ありがとうございますマスター・レガード』

「あなたのマスター・レイアーディーは、お前に会ってくれねえ？」

「うそ、ビックのジードイみたいで背中がむず痒い。

…ライセイバーも面白そうかも。」

『では、なんとお呼びすれば?』

「レッドもレイザードもマスターでも奥こぎだへ」

『では、マスター・レイアーディーもお呼び「レッド」…了解。レイアーディーお呼び

します』

「おへ、よひしへ頬むか。【ハリマ】」

「うそ、マスター・…とか呼ばれるのが嫌だつて聞かなかつた

『不束者ですが末永くよひしへお願こします。レイアーディー

「うそ、誰にそんなの習つた…?」

『ライラ様ですが何か?』

## 第2話 残されるもの達（後書き）

作者自身かなり駆け足な気がいたしますが原作まではこんな感じで進んで生きたいと思います。

レドの心理描写がなかなか安定してい無いような気がしますがまあ、本人の正確だと思っていただけると助かります。

では、また次話でお会いしましょう。

感想、アドバイス、誤字脱字等ございましたらお願いします。

### 第3話 修行と勉強それとネタ作り（前書き）

お久しぶりですしばらく時間が取れず時話投稿がかなり遅れてしま  
いました。

### 第3話 修行と勉強それとネタ作り

俺がグレアムおじさん元引き取られてしまふ年たちます。

「ほらほらまだまく行へよつ！――」

「ちよつ、アリアもう無理――！」

今年で6歳になるレザード・ウインストン現在修行中D.E.T.H。内容はいたつて簡単でアリアが放つ誘導弾を延延と避け続けるだけ。

ロッテ？

今頃クロノで遊んでるかクロノをフルボッコにしてみどりせせせせ

『レド前方から来ます』

ラミアからの指示を聞きながらも前方から向かってくる誘導弾を上半身を捻る事で避け

『続いて左から』

「あいよつ――！」

左から来るのは一步後退して避け

『後方から来ますよ』

「ホイツと

後ろから来るのを右に飛んで避ける。

この訓練、地獄のような辛さだが効率はすこぶる良い。

ラミアとのコンビネーションと状況判断、体力強化と一石二鳥である。

魔法を使用せず最小限の動きで避け続けること間もなく30分。最初は誘導弾の数も少なくスピードもゆっくりだったが時間経過に比例して数は増え、スピードも増加。後半は殆ど無酸素運動に近い。

俺のライフが限りなくになろうとした時

ジリリリリイリリツッ!!

漸く終了のアラームが鳴り響いた。

第3話 修行と勉強それとネタ作り

「つ、疲れた」

その場に座り込んで大きく息を吐く。

「お疲れ、レド」

そう言ってタオルとドリンクを手渡してくれるリーゼアリア。  
俺のお師匠様その一である。

「あんがとアリア」

タオルで汗を拭きつつドリンクに口をつけた。  
よく冷えたドリンクがのどを潤おしていく。

「それにしてもクロノもだけどレドも筋が良いわね」

「んあ？」

「今やつてる訓練。田に田に誘導弾の数とスピード増えてるのに気づいてる？」

「やうなのラミア？」

『はい、最初の頃に比べて被弾率がかなり落ちています』

胸元の青い宝石が点滅しながら答える。

「ほんと筋が良いやレドは資質も悪くないし、いつそのこと本氣で武装隊とか目指してみる？」

「うーん、とりあえずは『バイスマスター』資格取るのが最優先かな？平行してトレーニングは続けるけど」

うん、とりあえずはこれが最優先。

その後のことを考えるのは後だ。

ちなみに俺の魔力資質だが上の下らしく最終的にはAAA位まで行くのではないかと言つ話だ。

ミッド式の魔法には適性が低いため近代ベルカ式が俺の魔法スタイルとなる。

「それなら『バイスマスター』の勉強一本に絞ったほうが効率はよくないかな？」

「それもやうなんだけど。ラミアとかヴァイサーが折角なら使いこなせるようになりたいし。俺は自身の『デバイスすら使いこなせずに何がデバイスマイスターかつて考へてるし?』

「デバイスマイスターとは名の通り『デバイスを習得するもの』だが俺の目指すものは強いて言つうなら『デバイス【マスター】』つまりは『デバイスを習得、極めるもの』である。

『デバイスを作るだけでは極めたとは言えず作り出した『デバイス』を使いこなしてこそ極めたといえる。

「それが俺の目指す【デバイスマスター】である。そのためには日々の鍛錬と勉強が大事なのだよ。

「欲張りね」

「そうだよ、俺は欲張りなの。やりたい事が一杯あるから大変だ」「苦笑いのアリアに苦笑いで返す。

「そう、それじゃ吾のやつたことのためにお姉さんが一肌脱いで上げる」

「よろしくお願ひします」

「あ、次は私との模擬戦行くよ?」

「しゃあつお願いします。いくぞラミア!!-!-バリアジャケット展開と同時に、ヴァイサーがスタンバイ」

『了解しました。バリアジャケット展開、ヴァイサー・ガスタンバイ』

ラミアの返事と同時に光が俺を包み込む。

俺のバリアジャケット…つまりは騎士甲冑は

エリが起ててある黒のインナーに、タイトな赤いラインが入った

黒のズボン。

ジャケットは赤のジャケットで裾は短めで袖や裾に黒のライン。

両腕とも長袖。

黒と赤の穴あきグローブ

そして足首まである赤い腰布に黒い編み上げのブーツ。

ラミアはそのまま変化無し。青いペンドント。

イメージとしてはビージャの背徳の炎と弓兵を足して2で割った感じ。

騎士甲冑の展開が終わると田前に鞘に収められた片刃の剣が現れる。

それを鞘ごと掴んで腰に装着。

これが俺の戦闘体制だ。

ちなみにこのバリアジャケット、何種類か色のパターンがある。  
今展開するのが『赤と黒』のver2Pで他には『青と白』が

ver1P等など。

後、使用するデバイスによってBは変更予定。

「相変わらず格好だけは一人前ね。その身長だと衣装負けするわよ

？」

「ふん、後数年もすれば衣装に負けないくらいのイケメンになつて

るからいいんだよ

「うだよ、あと10年もすれば衣装が似合つ良い男になつてゐるはずなんだ…」

自意識過剰？

「知らんわ、両親共に美形だから俺も美形になるの…なるつたらなるの…！」

「はいはい、ルールはいつも通り。時間制限30分以内に私に一撃入れるか、最後まで立つてるかよ？」

「一撃ビリバロか倒してやる」

「カートリッジシステムの使用は禁止、OK？」

「了解」

カートリッジシステムの使用は絶賛禁止中だ。

今だ第一次成長期すら終えていない俺の体と安定化していないリンクー「コアに掛かる負担が大き過ぎるためラミアとの会議の結果、15歳まで封印することとなつた。

「それでは、はじめ…！」

アリアの合図と共にヴァイサーガを構えて俺は飛び出した…

「…知つてゐる天井だ。」

気がつけば、俺がいるのはグレアム亭の自室  
つい先ほどまでアリアと模擬戦してたんだが何故に俺はベットでお  
休み中? wh y?

『目が覚めましたかレド?』

声の先にはサイドテーブルに置かれた我が相棒」とリミア

「なんで俺、ベットで寝てたのさ? アリアとの模擬戦は?」

『覚えてないですか? アリアさんとの模擬戦は開始30秒でレド  
のTKO負けでしたよ?』

早つ

開始30秒とか一瞬じゃないかよ

確か、開始と同時にアリアの正面まで移動して“フラッシュ”によ  
る目潰し、“ソニックムーブ”で背後に回り込んでヴァイサーがで  
斬りかかるうとしたところで……あれ?

そこから先の記憶がポツカリありませんよ?

「もしかしてカウンター喰らつてそのまま撃沈した?」

『はい、その通りです。アリアさん曰く予想外の攻撃でしたので思  
わず本氣で攻撃してしまったとのことです』

「“フランシュ”見せるのは初めてだったからなあ、とはいえたアリアに本気を出させたんなら十分使えるね」

“フランシュ”とはその名の通り閃光を発するオリジナル魔法。因みに発案は俺、術式作成はラミアだ。魔力スフィアを形成しそのまま炸裂させるといったつて単純な術式だが発動も早く、魔力消費量も低いので使い勝手は上々。難点は攻撃力が皆無であるため田くらまし程度にしか使えないことだがそもそも攻撃用の魔法として開発してないので問題はない。

『はい、初見ならばほぼ確実に通用すると思われます。近接戦闘ならば非常に有効であるかと……』

「やつりえれば今日の修行は?」

『本日はこれで終了とのことです』

それは僥倖これで残りはデバイスマイスター資格の勉強とネタ作りなくてデバイスの原案を考えられる。

「よし、それじゃこのままマイスター資格の勉強に入るか」

『了解しました。私はスリープモードに入りますので何かあればお呼びください』

セーフティドームニアは数回点滅した後静かになつた

「さてと、始めますかね」

ベットから降り机に向かうとマイスター資格用の教材を開く  
目標は2年以内のA級マイスター資格の取得だ。

さて、なんだかんだで勉強も終え夕食を食しそ後のネタづ…原案作り中です。

「やつぱり遠距離攻撃用のデバイスは必要だよな…」

ネタ…じゃなくて原案ノートを広げつつ呟く。

『しかしレドの魔力適正では砲撃魔法習得は難しいですよ~』

「フニアの言つとおり俺の砲撃魔法の適性は限りなく低い、とこうよ  
り砲撃、射撃等の遠距離魔法の適性が低い。

近接くく移動く防御くく補助くく誘導制御型射撃くく直射型射撃  
くくくく越えられない壁くくくく砲撃

といつバリバリな近接タイプの魔導師である。

「となると、射撃魔法特化のデバイスか…」「レド、S2Uの整備  
を頼めるか?」ノックぐらうしょうねクロノ

ノックもせずにクロノが部屋に入ってくる。

一緒に家に住んでいるわけではないがリンディさんの仕事関係のた  
め週に1回ほどのペースでクロノはグレアム亭にて泊つていく。

リンディさんは今は一時的に後方勤務へと回っているが仕事量が多いらしく稀にクロノはうちに預けられるというわけだ。

「別にいいけど、俺じゃなくて専門の人には頼んだ方がいいんじゃないの？」

クロノからデバイス【S2U】を受け取る

以前にS2Uを参考代わりに見せてもらつて自己流でなんちゃつて整備したらその後からこいつやってちょくちょく頼まれるようになつたわけだが…

いいのかなあ俺まだマイスター資格取つてないんだけど

「レドの腕は信頼できるつてアリアが言つてたから大丈夫だ…！」

「えと…」

そつやり取りをしながらS2Uを待機状態のままチェックする。

「リニア、スキャン開始」

《了解》

リニアのコアが数回点滅しS2Uのスキャンを開始する

これには10分ほど時間がかかるのでその間にクロノと雑談に入る

ふむ、どうせならこいつにアドバイスでも聞いてみるか子供の方が頭は柔らかいからな

「なあ、なあクロノ」

「何だレッド？」

「遠くの敵を攻撃する武器って何があるか？」

「ブレイズキャノンで攻撃する……」

「ノーシンキングで答えてくれた。

「それだと魔法だろ？俺が言つてるの剣とか槍とかの武器だ」

「こいつ今の知力で執務官になれんかな？お兄さんは心配ですよ？

「剣や、槍を投げる……」

数秒考えての回答

「よし、よし、もう少し考えてから答える。それだと投げた後に自分の武器が無くなるだろうが…まだ敵がいたらどうするのさ？」

「別の剣で戦う……」

「……OK、OK。俺の訊き方が悪かった。自分の持つてる武器を投げないで相手に攻撃するにはどんな武器を使えばいい？」

「これは俺の訊き方が悪いんだ…クロノがちょっと弱いわけではないでも、この方法は在りだ魔力で作成した剣を分投げての攻撃は使えるし爆発とかするようにすれば遠距離でもある程度対応できるな。

「じゃあ『』だ……」

じょりくつこうん唸っていたが名案が浮かんだとばかりに胸を張つて答えてくれた。

「なるほど」「か……！？…ナイス案だクロノ。それ採用ね」

「ちょつぢこ原案があるじゃないか…近接をヴァイサーバにするなら遠距離はこいつしかない！」

「よっしゃ、決まりだ！！」

手にペンを持ちスラスラとノートへと書き込んでいく  
どうせならラミア繋がりであれも作ろう…オリジナル性には欠ける  
がこいつらなら使い方も把握できるしバランスも良い

「はっはあーーー最高にハイってやつだあーーー」

夜のグレアム亭に俺の奇声が響いた。

若干クロノが引いている気がするが知らん俺の溢れだすパッション  
は止まらないぜーーー

当然この後気持ちよく睡眠中だったアリアに怒られたのは言ひまで  
もない。

夜9時に睡眠とかどんだけとか思つたら拳骨されました。

『レド、S2Cの解析終了しました』

アリアにプレゼントされたたんこぶに涙を浮かべていると電子音とともにニラニアが解析の終了を教えてくれた

「サンキュー、上ひじ回して」

《了解》

田の前に空間モニターが立ち上がり、その映し出される

「ん~特に大きな損傷はなさそうだな…これくらいなら自己修復モードで何とかなるな…ただ、ところどころ魔力渾があるから一度近づいてみたかったんだよ」としたオーバーホールやった方がいいかもな」

「じゃ、オーバーホールもやってくれ…!」

「いやいや、無理だから」

今の俺に出来るのは整備の真似事だけ、ましてや専用の機材すらないのにオーバーホールなどできません。  
しかもS2Hはクライドさんの形見、やつてみて失敗して壊しちた何ぞシャレにならんわ。

「じゃあ、レドがデバイスマイスターになつたら僕の専属マイスターになつてくれ!!」

「何とも気が早いことで…

「はん、執務官になつてからスカウトしに来い。そしたらお前のデバイスの面倒見てやるよ」

「ついでにS2Hをクロノに手渡す

「よし、約束だぞ!!僕が執務官になつたら君には僕の補佐官をや

つても、もうからなーー！」

俺が、さう受け取りクロノは息巻いて部屋から出ていく  
あるれえ？なんでテバイスの整備やるって答えたのにはいつの補佐  
官やることになつてんだ？

「まあ、いいか。」

どうせ冗談だらうと思っていたがこのとき訂正しなかつたことが後  
々俺を厄介なことに巻き込んで行くのはこの時の俺は知る由もなか  
つた

### 第3話 修行と勉強それとネタ作り（後書き）

前書きでも言いましたがお久しぶりです。

リアルが忙しいのと自身の文才の無さのため3ヶ月近く放置してしまい申し訳ありません。

忙しさは落ち着きましたので更新頑張りたいと思います。

誤字脱字、感想お待ちしております

## 第4話　題外席へのアマチュア飛行機（漫畫）

またまた。お久しぶりです。

お待たせいたしました第4話です。

P V 1 0 - 0 0 0 ユニーコ 3 - 0 0 0 超えました。

ありがとうございます。

《ついに完成しましたね？》

「うん、これで完成つと」

やあ、皆さんお元気かい？

二年ほど前にA級テバイスマイスター資格を取得したレザード・ウインストンです。

時間が飛びすぎだつて？

ここ数年デバイス関連の勉強とロツテ + アリアと訓練しかしてない  
から問題ないんです。

現在俺がいるのは実家の地下室。

長年開かずの間とわたしてた部屋たかーい先日父さんの書斎にて鍵を発見。

地下に降りてみてびっくり、何とあのお父様自宅に研究室というか工房持つてましたよ。

おかげで長年制作していたデバイスがついに完成、これでミドルレンジでクロノといい勝負ができるようになります。

クロノは現在、今年の執務官試験に向けて猛勉強中で士官学校で頑張っている模様。

あ、ちなみに俺とクロノ一人揃つて既にアリアとロッシテからは卒業しました。

何故か最後まで一緒に修行してかつたけどね、なんでもお師匠様二人で賭けを企画内容は最後に模擬戦をやらせてどっちが勝つかのこと

ちなみにその時は俺が圧勝、開始と同時に魔力スフィアばらまいて“フラッシュ”を発動そのまま背後に回り込んでヴァイサーガを後頭部に直撃で終了でした。

半年ほど前まで愚直バカだったのだがアリアにいじめられた成果か落ち着いて行動できるようになった。

おかげで最近模擬戦で勝てない、ミドル～ロングレンジからの攻撃でいやらしく戦うようになってしまった。

勝率は大体30%くらい。

だがついに完成したこのおかれで50%くらいにはなると思ふ。

『今レドだと精々、4割くらいが限界でしょう』

「む、何でよラミア？ てかモノローグにつっこまないでくれないかな」

【はいつの間に読唇術まで覚えやがった？】

《だつて、あなたここ半年ほど魔法関係の訓練やつてませんよね？》

ほぼ毎日朝から晩まで工房に籠もつてた事を想定すれば当然でしょう。』

「一応。マルチタスクで仮想訓練はやつてたよ?」

『そこは否定しませんが身体能力結構落ちてますよ?半年前まではきつぎりAランクくらいの実力が今はBランクですよ?』

「まあ、何とかなるでしょ?しばらく工房に籠もるつもりもないし。ここいつも使いこなせるようにならないと…」

目の前の二つのデバイス。

ロングレンジとミドルレンジでの戦闘に特化して作り上げたAI非搭載型のアームドデバイス。

アンジュルグとアシュセイヴァー

アンジュルグは大型弓で完全に長距離用。

クロスレンジでの戦闘力は皆無だが強力な射撃魔法の行使が可能となつた。

アシュセイヴァーは初期の段階では銃型にするつもりだったが、ミドルレンジでの戦闘をメインとするために結局は銃と剣二つの機能を使用できるようにしたら

Kな主人公機の武器とほとんど同じに…ステアードに改名するべきだろうか

アシュセイヴァーは火力不足の可能性があるためフルドライブも搭載予定。

『これでとりあえずはオールレンジで立回れるようになりますね?』

「だな、これでアリアに近接バカと言われないですむ」

近距離特化のヴァイサー・ガ、遠距離特化のアンジュルグ、バランスタイプのアシュセイヴァー

この三機をメインに戦う予定なのだが…使っこなせるのかが問題だ。

『早速、訓練しますか?私のコンクも終了してるのですぐここでも使えますよ?』

「動作検証は済んでるから、あとは実践での使い勝手と確認だね。」

『クロノさんから模擬戦のラブコールが届いてましたから。近いうちに対戦なさってはどうですか?』

「うん、それ模擬戦だけじゃなくて補佐官のラブコールも混ざってるよね?」

俺がマイスター資格を取得した後クロノからの勧誘が非常にしつこい何故か奴の頭の中では俺が補佐官になるのは決定事項らしく3日に一度メールが一週間に一度通信が掛かってくる

『補佐官の資格試験受けてみたらどうですか?』

「そりやあ。デバイスママイスター資格取るよりも簡単そうだけど。」

俺法律関係苦手なんだよ

しかし、腹減った何か作るかね。

ちょうど飯時だし…

地下室から出て、キッチンへと移動しますか。

『またまた、クロノさんには興味ないとか言つておいでしつかりその手の問題集隠しているのは知つてますよ?』

「そりや、資格関係は持つてて損はないから。」

うん、これは本当だ。

この世界【ミッドチルダ】での就職年齢は地球上に比べると恐ろしく低い。

俺ぐらいの年で働いている連中は少なくない。

元に俺はフリーのデバイスマイスターであり、嘱託魔導師として働いている。

因みに魔導師ランクは空戦B。

地上本部、本局からは是非技術部へなんてスカウトもされるけど、まだまだ色々勉強したいのと自身のデバイスが出来上がっていないのを理由にすべてお断りしている。

『期間限定でお受けしてあげたらどうですか?』

「そうだなあ。とはいえるまではカートリッジ使えない

から魔導師としての戦力そんな高くないぜ?」

会話しながらも手は休めません。

ん~何か食いもん食いもん…お、パスタ発見。

確か、冷蔵庫にベーコンとケチャップ、ピーマンがあつたはず。

『それは、あなたが訓練しないからでしょ~!~元に魔力ランクだけならA~Aクラスですよ?』

「ナポリタンでいいか…」

『ちょっと、ひとの話を聞いてくださいよ…!~』

「ちゃんと聞いてますつて…デバイスのくせにひとの話をね…お、今上手いこといつたか俺?」

『言えてません…!~』

等といいながらも深いお鍋に水をためて火をかける。

「ま、じまじくはのんびり行くぞ。囁託続けながらね」

とか言つてると通信が掛かる。

「あん？またクロノか？」

端末を確認するとそこにはもう一人のしつこい奴の名前。

「ジーザス…」

『取りなくて良いんですか？下手をするといつまでも押しかけてきますよ？』

流石に家にまで来られると非常に非常にめんどくさい事になるので嫌々だが通信を開く。

当然 SOUND ONLY で

「はい」

『あ、わたしわたし』

『俺にはわたしわたしなんて知り合いでございません』

それだけ言つと通信を叩き切る。

後ついでに着信拒否だな。

俺は飯食いたいのよ。

「そ、そろそろ湧いたかな？」

『こきなり通信切るなんてひどいよねーー!』

お鍋の中身を確認しようとしたら皿の前に空闇、ディスプレイが立ち上がった。

「ジーザス…」

『相変わらず無駄に高性能ですねマリエルさん』

「あのね、問答無用でこっちにハッキングして通信繋ぐのはひどくないマリエル?」

『私にかかればこれくらいこちよいのちよい』

ディスプレイに映るタレ眉メガネはマリエル・アテンザ。

本局技術部所属のメカニックマイスターでデバイスから機械類はなんでもこなれるスーパー工学女。

2年前に知り合って以来俺をしつこべスカウトしてくれる。

「悪いけど技術部に入るつもりはないよ?」

『さうそう諦めるつもりはないよ? きみくらいの実力があるなら絶対にうちに入り込みたいからね』

「はいはい。んで、今日は何の用? 悪いけど俺今から飯なの、腹

ペ」「なの、OK?」

『じゃあ、お姉さんがお皿に飯箸つたげるから何うと出でない  
?』

「非常に魅力的な提案だけども……何企んでるのかな?」

《あなたが斬つてくれるなんて恐いんですナビ?》

絶対碌でもないと頼まれるに違いない。

『一人揃つてひどいね!…ちょっと相談事があるだけだよーーー』

「あん?珍しいねマリエルが相談事なんて、何。男でもできた?」

『無い無い~たとえ男が言い寄つてもお断りよ。今のところは仕事が恋人で十分』

あいおい、13歳で既にワーカーホリックと申すか。

《マリエルさんあなたその考え方だと一生独り身になりますよ?》

『大丈夫、いざとなつたらレド君に貰つてもらつから

なんて言いながらウインクしやがった。

「金積まれてもお断りだよ」

『まあ、とつあえず地上本部まで来ない?今丁度ソーラーに来てるんだ』

俺の皮肉もなんのその軽く流してそのまま話しあげます。

「まあ、飯奢ってくれるとの事だからしょうがないから行つてあげよ!」

とりあえずつけたコンロの火を消す。

お湯湧いてなくてよかつた~これで飯代が浮くね。

『どんだけ上から田線なのが君はーー!あつたくそれじゃ、地上本部のロビーで待つてゐからよろしくね』

「あいよ、それじゃ後でな

着替えてソーラーの格納領域にアンジュルグとアシュセイバーを仕舞つ

『何ですかね相談事つて?』

「デバイス関係のことじやないか?』

『また、面白みのない回答を…案外告白だつたらどうします?』

「ない、ない。』

身支度を整えて家を出た

「んで、相談事って何さ？」

現在グラナガンのファミレスにて食後のコーヒー・ブレイク中です。  
いやあ、美味かつた。余は満腹じや。  
遠慮なく注文したから若干マリホール涙目だつたけど…良いじやん高い給料もらつてるんだから。

「うん、実はこれなんだ…」

田の前に食後のティータイム中のマリホールが俺の前に空闊テイスプレイを立ち上げる。  
何々…

「魔導師の戦力強化？」

「そ、管理局の慢性的な人員不足及び魔導師不足は知ってるよね？」

「一応な、て言つた魔導師の戦力強化つて…」

無理じゃね？

ある程度なら努力で何とかなるけど魔法の威力なんか所詮は力押し  
…つまりところ個々の魔力資質に依存するわけだし。

『魔法の威力は魔力量に依存しますから難しくないですか？』

「ラリアの言うとおり何だけども…」

マリエルは大きなため息をついてカップを戻す。

「しょうがないじゃない…地上本部と本局からの連名なんだもん」

つまり上からの命令だから何とかしようと…

「というわけでなんかいい案出して」

「また無茶ぶりを…お前に考え方がないもんが俺に考えられると…」

う~む…

「フルドライブシステムとかどうよ？」

「難しいと思うよ～フルドライブシステムなんて魔力ありきの“”  
押しだし。」

「だよなあ……」

『デバイスや術者にも程度はあれ負担がかかりますしね』

高ランク魔導師じゃないと数分も持たずにガス欠だな。

「なら一時的リミットブレイクは？」

「ベルガ式ならいいかもね……それでも連発はできないんじゃない？」

とりあえずこれは保留。

『カートリッジシステムはどうでしょう？ 成人の方ならば負担はかかりますがそこまで重いものではないですし』

「ミッド式デバイスにカートリッジシステム積むのか、理論的には可能だけど……その場合はミッド式のカートリッジシステムの開発から始めるといとダメか？」

「だね、試験的にベルガ式でやつてみてもいいと思うけど……その場合は基礎フレームからの設計にしないと……」

「ああ～アームドデバイスと違つてストレージやインテリジェントデバイスはもういからなあ……」

「特にインテリジェントデバイスは纖細だから……」

「でもいい案ではあるんだよなあ……カートリッジシステムの魔力変換効率とか上昇できるようにするだけでも効果あるよな？」

「となると、カートリッジそのものも改良しないといけないね」

『私のように、コアとデバイスを分離した形での使用は?』

「無理無理、コスト掛かり過ぎるわ…ワンオフならそれでいいけど  
量産には向かん」

「魔力変換技能に特化させるのは?」

「量産できるならともかくこれもコスト掛かるべ?」

まあ、変換特化型のデバイスは面白そ'うだけど。  
多分恐ろしく金掛かるや…

そのまま二人であーでもないこーでもないと議論を続ける。

結果…

「それじゃ、俺はミッド式カートリッジシステムと魔力変換効率の  
JPの研究」

「私は基礎フレームと処理速度の上昇担当だね」

あるれえ？

「なんで俺も開発参加することになつてんだよーーー。」

「マリエルとの議論に熱くなり過ぎて気付かなかつたけど俺も参加するのー?」

「ええ~良いじゃん私と本局で頑張ろうよ」

「ヤダ、本局とか絶対にヤダ」

「なんだそんに嫌がるかなあ…」

『マリエルさん、この人の後見人と保護者誰だかお忘れですか?』

「グレアム提督にハラオウン提督……なるほど」

俺が本局に行きたがらない事情を察してくれたらしく苦笑いを浮かべる。

「じつは…リンティさんとそのお友達のレティ提督が…」

レティ提督はそんなでもないけどリンティさんが非常に非常にしつこい。

技術部じゃなくて武装隊への勧誘が…俺あくまでテバイスマスターがいいんだけど…一応戦えるけど。

「おじさんはそもそも無くて助かってるんだけど…」

グレアムおじさんは基本的に俺の事由にすればいいと言つてくれるるので非常に助かる。

ロッテとアリアも何も言つてこない。

『もしこの人が本局の技術局に配属されてみてください…あの手こ

の手で武装隊、もしくは次元航行艦に配属されます》

「十中八九非常戦力として扱うよね…」

あ、やばい泣きたつ。

「あははは…」

マリエルどん引き。

「そ、それじゃ地上本部なりじつかな？今回のプロジェクトは本局・地上本部合同なんだ」

確かに地上本部ならリンクトイさんの権力も届かないけど…

「非常勤でもいいなら…俺自身魔導師としての訓練もおろかにしだくない」

「それならどこの部隊に技術官として行ってみる？訓練もできるし開発もできるよ…！」

「助かるけど、マリエル地上本部にパイプあるの？」

「うん、俺結構我儘な」と言つてたけど大丈夫なのか？

「むふふ、技術部なめたらあきませんよ。本局と地上本部は確かに仲が悪いけど技術部は別、互いに魔導師の命を預かるような仕事してるんだから技術提供し合つて少しでも落ちる人を少なくするために頑張ってるの」

「へえ～、す“こ”な

「13年くらい前かな？何でも一人の“バイスマスターのおかげら  
しこよ～」

す“こ”になその人。まさに開発者の鏡といった感じだ。

「というわけなんで、技術部経由でお願いすれば問題なし

「じゃ、もうこいつ」とドレミわ《レド》ギーしたラマア？」

よかつたこれでロンディさんから逃げられる。

一安心したところで既に冷めてしまつたコーヒーをグビ。

『時間はよろしいのですか？』

「ほえ？」

そつとつて店内に時計を見ると…

「20時！」

確か飯食い終わつて話出したのが…14時くらいだから

「6時間も話してたのか俺らー？」

いやあ、時間がたつの早すぎる。  
技術的な会話になるとこいつ間に時間が過ぎてこくなあ…

『こえ、もう言つてはなくて。』

「こじてもそろそろ帰らないと……ジーザス」

《思に出されましたか?》

「あ、もしかして何か予定あった?」

うん、あつたよ予定…今日はグレアム亭で四人そろつての『飯する約束が…

おじさんたちが出張から戻ってきたから久しぶりに『飯食べよつて誘われてた。

アリアとロッテが腕によりをかけておいしい物作るつて…確か時間は20時。

「『めん、マリエル。今日はこれで帰る、詳しいことはまた今度でつ…!』

「うそ、またねレド君」

マリエルに挨拶して慌てて店を出る。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ

「なんでもつと早く言わなこのせーー..」

グレアム亭へと向かい爆走しながら『トトト』と文句を言つてやる。

《私が何度も伝えようとしたのに「今良こと」のなんだから後ろにさ」って言つたのはレドじゃないですか!..》

「畜生、もう間に合わん、転送するぞーー!」

『駄目に決まっているでしょう……そもそも転送魔法なんてほとんど練習してない癖に何言つてますか！？』

「つか、しょうがない飛ぶぞ！？」

『そもそも、市街地での魔法使用は禁止されています……もしかして怒られてください！？』

「不幸だああ……」

『自業自得です』

あははは、行っちゃったなあ…

ラミアと一緒に慌てて帰つて行つたレド君の後姿を見送りつつ冷めきつた紅茶を飲む。

彼と初めて出会つたのは一年前、A級デバイスマスター試験の会場。

一度目に会つたのは合格発表の時でその時はじめて彼に声をかけた。てつくり自分が最年少受験者だと思つてたら自分より小さい子供がいて驚いたのが第一印象。

話してみると見た眼とは裏腹にすごく大人びていて一人でデバイス談議に花を咲かせたことは懐かしい。

てつきり技術部に入ると思つていたけどフリーのデバイスマスターをやるつて聞いて勿体ないと思つた。

ことデバイスに関してなら彼は私以上に詳しかつたから…だからアドレスを聞いて頻繁に技術部に勧誘した。

最初のころは比較的丁寧な口調だったのが一月経つ頃には砕けた口調になつて印象が変わつた。

変に大人びているんだけどさき見せる年相応少年の顔がグツと  
来たりして…偶にハイテンションになり過ぎて壊れるけど。

勧誘を口実にして週に一度くらいお話しするのが楽しみになつたり  
して…弟みたいな、友達みたいな?  
中々美少年だから今のうちにキープしておくれのもいいかもしれない  
なんて考えたり。

「おかしいなあ…私年上趣味だつたんだけど…」

まあ、この辺りはそんな氣にすることでもないか…

「でもレド君気づいてるのかなあ…」

地上部隊に技術官として配属されても魔導師として訓練してたら多  
分非常戦力とカウンタされると思うんだけど…

「まあ、でも良いか

そのことに気付いた時のリアクションを想像すると自然と笑みがこ  
ぼれた。

夜、めずらしく彼のほうから連絡があつたときは頭に大きなたんこ  
ぶを一つ作っていた。

涙目にちょっとヒヂキッとしたのは私だけの秘密。



## 第4話　題名考へるのやうやうめりゆづかと（後書き）

今回はなかなかの文字数を記録。

毎回これくらいの分量になるよつ頑張ります。

感想・アドバイスおまちします。

## 第5話 ついにキタ、念願の射撃魔法（前書き）

お待たせして申し訳ありませんでした

## 第5話 ついにキタ、念願の射撃魔法

さて、地上部隊にバイスマイスターとして所属する」と決まりたわけだがその前にやることがある。

クロノおよびリンクダイさんへの報告だ。グレアムおじさんと、ロッテアリアには報告済みで二人とも頑張れと応援してくれたわけなんだが・・・

現在俺がいるのは本局の通路。

クロノへの報告は執務官試験が終わってからこじりと書いている。今下手に報告して間近に迫つた執務官試験に落ちられてもシャレにならん。

目的の部屋の前まで到着したのだがハッキリ言つて...

「帰りたい...」

《ほらほら面倒なことは早く終わらせてしまいましょう》

「へいへい

フリマに足されて渋々、部屋のインターフォンを押す。

「レガーディー

『はい』

『待つてたわよレード君、どういへば』

「失礼しま～す」

部屋の主に許可をもらつて部屋に入るわけだが……うわ

“めちやめちや笑顔ですね”

“絶対勘違いしてる”

“まあ、頑張つてください私はスリープモードに入りますから”

“す、するいゼ!!ニア！！”

“…………”

畜生、本当にスリープしやがった。

「ふふ、待つっていたわよレード君。」

部屋の一 角に用意された接客用のソファーに互いに腰掛ける。

「「一ヒーでいいかしら?」

「あ、どもです」

「それで、今日は管理局への入局といつこといいのかしら?」

「ええ、非常勤という形ですけど。一時的に技術官として働こうか

と…」

非常勤とこう、言葉を聞いてコントローラーさんが一瞬固まつたけど気がせ  
ず一気に報告する。

「配属先はまだ決まってないですけれど。地上本部の部隊になると  
思こます。」

「やう、わかつたわ。」

・・・・あれ？

「怒りないんですか？」

「うん、俺はひつきつ【陸】で働くなんて許しませんと詰わるのでは  
かり。」

「あら～怒りたいのかしら？」

「こや、コンティナ搬入してから海で仕事  
する気満々なのだと」

「やうね、できれば海に来てほしきのが本音。」

「そう言つて弧ひーに角砂糖を一つまた一つまた一つまたまた一つ…

「うひ、砂糖入れ過ぎつー。」

「やつ？たくさん入れる方がおいしのよ？」

「限度つてもんがあります！」

うん、結局全部で10個近く角砂糖入れたよこの人。

見てるだけで胸やけしそうなコーヒーとか初めて見たよ。

「とはいえレド君が自分で決めたのなら私から言つことは特にならないわ、頑張ってね」

『あれだけレドをしつこく本局に誘つておいていざレドが地上本部で働くことになつたら頑張れとか何を企んでおいでですかリンディ提督？』

うとうと、ここまですんなり行くと何考えてるのか怖いよね……

……

“つて、『ミニアはスリープ入ったんじゃないの！？』

“いや、とりあえず狸寝入りしてました。リングティさんが何を企んでるのか非常に気になりますし”

“なら、最初から教えておいてくれもいいじゃんかよー”

“駄目ですよ、そんなことしたらあなためんどくさがって全部私にやらせるじゃないですか”

残念、バレたか

「実はグレアム提督から本人の意思を尊重するよつこへぎを刺され  
ちやつたのよ」

「グレアムおじさんが？」

あるれえ？

俺グレアムおじさんにはリンディさんがしつこいとか愚痴った記憶  
はないんだけどな…何で知つてんのあの人？

“アレじゃないですか以前一度、ロッテさんとアリアさんに愚痴つ  
てましたよね？”

ああ～そつこえばマイスター資格修得してからあまりにスカウトが  
激しいから愚痴つたような氣もする

“うん、とりあえず俺の思考読んで念話入れるのやめてくれないか  
な？恐いから…”

“顔に書いてありますよ？”

“俺そんなに顔に出やすいか？”

“いえいえ、せいぜい分かるのは私とグレアム提督ぐらいじゃない  
でしょうか？ロッテさんとアリアさんも気づくかもされませんね”

つまりは身内連中にはバレバレなのか

《なるほど、それで合点がいきました》

「とまあ、そういうわけなので本局で働きたくないつたりこつでも連絡してくれる嬉しいわ」

「まあ、考えておきますけど。武装隊にはこきまわからねー。」

「あら、残念」

しつこく勧誘するのはやめてくれるみたいだけどなんとか勧誘自体はやめてくれそうにならない。

そのうしあつたびに勧誘されて断るのが挨拶みたいになります。

「クロノにはまだ伝えていないのかしら？」

「ええ、執務官試験前ですから。」

ぶつひやけると、試験に落ちたら落ちたで助かるのだが。

クロノの夢を知ってる俺としては応援する気持ちの方が強い、補佐官はやらないうけど。

「このまえ話したら、「レドを補佐官にして何事件をバンバン解決する」とこって張り切ってたわよ?」

「あいつの頭の中では俺が補佐官やるの決定事項ですか

前言撤回やっぱり落つか、俺は補佐官やらないからなーーー

「ああ見えてあの子はしつこいから頑張ってね

《頑張つてくださいね、レド》

「リンクティさんはともかくなんでもラミアまで他人事あつかい！？」

『いや、私個人の意見としてはレドが魔導師として前線に出たら当然私の仕事が増えるわけでして』

「ヒヅのつまりヅっちでも良いと？」

『YES、Master.』

こんな時だけ主人扱いすんなコラ。

「ふふ、ラミアもかなり人間味が出てきたわね？」

『稼働年数もそろそろ6年ですし、レドは暇があれば常に私と会話してくれますからね』

「良いことじやない、少なくとも私は無愛想なインテリジョントバイスよりもいいと思つわよ？」

『ありがとうございます、リンクティ提督』

「魔導師としてもバイスマイスターとしても俺の大事な相棒ですからね」

しばらく他愛のない話をしてもリンクティさんの部屋を出た。

しばらく歩き到着したのは本局自慢の訓練施設。

「悪い、待ったか？」

「あ、思つてたよりも早かつたね」

そこで待ち合わせていたマリエルと会流した。

「しかし悪いな、付き合つてもうつて

「なんのなんの、レド君からの頼み事なんて珍しいからね」

『といつのば建前で本音は新型デバイス見たからですよね?』

「やうやく、実はそうなの

そこは嘘でもいいから否定してほしかった。

さて、薄々気づいてると思うが今回訓練場で行つのは新型デバイスの動作検証テストです。

本来ならアリアかロッテにお願いする予定だったが、グレアムおじさんが忙しいらしくそのお手伝いに一人揃つて狩り出されているため急遽マリエルにお願いした。

他の魔導師からの意見も欲しかったのだが残念ながら知り合いに魔導師はないのであきらめ、同じデバイスマイスター資格を持つマリエルの出番といつわけだ。

あん?クロノ?

あいつに手の内見せるわけないじゃん。

クロノがアンジュルグとアシュセイヴォーを見るとき=俺の勝利という方程式が成り立たないからな。

「はあ、まあいいけどね」

『おしゃべりはこのへりここにして早速始めますか?』

「だな、マリエル」

「OK、測定器その他もう準備できてるよ」

そつまつてマリエルが端末を操作するとホログラムが立ち上がり殺風景な訓練施設が一瞬で街中になる。

「ハハア、セットアップ」

『Set up』

光に包まれると同時にバリアジャケットが展開される。

本日のカラーは青と白のver.1P

「続いて、アンジュルグスタンバイ」

『アンジュルグスタンバイ』

左手に大型の弓が、右腕に銀色のガントレットが出現する。

「へえ～それが射撃特化のデバイス？」

「正確には直射射撃特化だ」

全容量の7割を直射射撃魔法用の専用プログラムと処理に費やし、残りの3割を誘導制御魔法用に回した。デバイスとしての完成度性能ともに申し分ないが一般魔導師からすればいかれているとしか言えないデバイスである。

『完全に射撃魔法を使うためだけのデバイスですね』

『ターゲットスフィアの数は10機、フィールドは都市、ランクB。スタート』

マリエルの命運と同時に10機のスフィアが出現し半分は浮遊、残りの半分は不規則に動き始める

「久しぶりの訓練だけいけるなマニアっ！」

左手のアンジュルグを握りなおす。

『当然です。むしろそのセリフそつくりお返しちゃいますよ？』

「上等だ、行くぞーー！」

かりそめの空へと飛び出した。

「まずは直射型で浮いてるのを落とすー」

『了解』

「イリュージョン・アロー」

アンジュルグを構え、魔力で編まれた弦を引く。同時に俺の魔力により矢が形成されて……

「狙いは…外さん！！」

『Fire』

ターゲットスファイアを打ち抜いた。

やつぱりいいなあ、射撃魔法それも念願の直射型。今までの射撃魔法と言つたらヴァイサーガの烈火刃（誘導制御型）と斬撃飛ばす地斬疾空閃だけ。

作つてよかつたアンジュルグ。

因みに今更だけど俺の魔力光は緑だ。

『感動するのは後にして次に行つてくださいーー！』

「あいよおーー！」

次のターゲットスファイアを狙い。

『シャドウランサーーー！』

右腕のガントレットを向けると先端に小型の魔力スファイアが形成され槍状の魔力弾が無数に発射。

そのまま複数のターゲットスフィアを打ち抜く。

「ヤバい、射撃魔法楽しすぎる。」

「次い！！誘導制御型行くぞつーー！」

『了解しました』

「ステインガー」

動いているターゲットスフィアを狙い

『arrow』

イリュージョン・アロー よりやや短めの矢がスフィアを追いかけ、  
追い詰め、貫いた。

「ラミア、アンジュルグの状態は？」

『すべて予測値以内です。問題ありません』

つまりは動作にも今のところ問題無か。

「良し、アレも使つぞ」

『良いんですか？カートリッジの使用無しではイリュージョン・ア  
ローに毛が生えた程度の威力ですよ？』

「チャージ時間増やせば威力は出るだろ？どうせ、使うことになる  
んだから一応データー取つておきたい」

『わかりました』

今の俺に打てる最大出力の射撃魔法、本来ならカートリッジ使用によりことで短時間で打つ魔法だが一回くらいは撃つておきたい。

「コモリ解除…コード・ファンтомフォニックス…」

アンジュルグを構えて限界まで弓を引き絞る

『チャージ開始します』

少しずつ魔力がチャージされていき矢が緑色に輝く。



「つて、長いなオイ！！」

『本来ならカートリッジ使用が前提なんですから当たり前です！…』

うん、まあ覚悟してたけどここまで長いとは思わなかつたよ。  
こりゃ実戦での使用は無理だな。

『…………チャージ完了しました』

「あいよー」

「いけえ！！」

残りのスフィアが一直線に並ぶ瞬間を狙つて矢を放つ。

『Phantom phoenix』

放されたファントムフェニックスはスフィアを飲み込んだ。  
自分で術式組んでおいてなんだけどここまで高威力な魔法だつた  
か？

…ま、いつか。

アンジュルグが排熱を行い、蒸氣が排出される。

「全ターゲット撃破…ってか？アンジュルグに不具合は？」

『特に大きな問題はありません、ただ最後のファントムフェニック  
スは早々連発できそうにないですよ？』

そこはまあ、予想してた。

足り無い資質をデバイスでカバーしてるから負担が馬鹿にならないんだよなあ

『今まで大体カートリッジ5発分の魔力ですけど』

なるほどそれなら今の高威力にも納と…はあつ！？

「おま、カートリッジ5発つて理論値限界じゃー！？」

『動作検証なんですから限界の威力出さないでビビツするんですか？』

「そりゃ、そうだけだ。先に教えてくれよ

『あなた途中でビビツてチャージ完了前に撃つでしょ？』

……うん、壊れたら嫌だから撃つね多分。

「そ、次はアシュセイヴァーだな」

『このヘタレ』

何とでもいえ、折角作ったのに速攻で壊れたら泣くわ。

『データ取りはバツチリだよ、早速見る？』

「いや、そのままもうアシュセイヴァーの方も動作検証やるわ

マリエルと会話しながらも一応、アンジュルグの状態を軽くチェック

ク。

『りょうか～い、条件は今のままでいいのかな?』

「スフィアの数半分に減らしてくれ」

うん、ウニアの言つとおり特に大きなダメージはないな。  
これなら十分実戦で使用できる。

『はいは～い、他に何か』要望は?』

「最後に2機だけ大型スフィア出してもらいたい?』

『ん、準備できたよ?』

「ハリニア、アシュセイヴォーを」

『了解、アンジュルグ格納。アシュセイヴォースタンバイ』

左手のアンジュルグが消えると同時に右手にソードモードのアシュセイヴォーが現れる。

『じゃ、始めるよ～』

先ほどとは半数のスフィアが出現する。

まずは一つ目

飛行しながらすれ違いざまに横一文字で切りつける。

「ラ//ア！」

『Sonic Movie』

ソニックムーブで移動しアシュセイヴナーを逆手に持ちかえて下から切り上げる。

「アシュセイヴナー、ガンモード」

『了解』

片側の刃がスライドしてトリガーとグリップが出現、銃口が開く。ぐるりと一回転させてグリップを握りトリガーを引く。

「ショットーー！」

魔力弾を生成して発射。

大きく弧を描いてターゲットスマッシュに衝突。

「アクセルショーターーー！」

先端に6つの魔力弾を形成し

「シューートーー！」

それぞれ違う弧を描き2つのスマッシュに3発ずつ衝突。

うん、思つた以上に使いやすい。

刃の部分は魔力の通りもいいし切れ味もそこそこ、射撃魔法は誘導制御も楽で魔力弾生成も早い。

やはり3機の中では一番バランスがいいな。

『大型スフィア、2基来ます』

「良し、砲撃魔法行くぞ！」

『了解、チャージ開始します』

アシュセイヴァーの先端に魔力がチャージされる…

「やつぱり長いな。」

『これも本来ならカートリッジ使用前提ですからね、15歳になるまでは我慢してください』

やっぱ実戦じゃ使用できそうにないなあ

『実際問題カートリッジ使用しても精々がAランク程度の威力なんですがね』

「まあ、セロはロマンだよ……それにほり、切れる札は多い方がいいしね」

『確かに良くも悪くもワイルドカードになり得ますけど……使う機会ありますかね?』

「無いなら無いで良いんだよ。」

『あ、チャージ完了しました撃てますよ?』

「いぐぜえー!」

「ハルバートオ《Buster》」

緑色の極太レーザーが大型スフィアを飲み込んだ。

「良し、威力も申し分なし」

「我がお師匠ですら匙を投げた俺の砲撃魔法だがとりあえずは撃てた。デバイスマスターでよかつた(涙)

魔力ランクA Aなのに……いろいろ小細工してAランクの砲撃が限界……どうせならチート補正が欲しかった。

『残存スフィア、残り1です』

「アシュセイヴナー・ソードモード」

銃としての機能を格納して再び剣として使用可能にする。

出来ることならカートツリッジ使用でやりたいんだが……  
アシュセイヴァーの刀身に魔力を薄く高くコーティングしていく。  
ヴァイサーガの術式プログラムを応用して作りだした、専用の近接  
魔法。

「プレイブスラッシュユー！」

最後の大型スフィアを唐竹でたたつ切る！

「我に断てぬ物無し」

『どこの悪を断つ人ですかあなたは……』

何で知つてんのアニア？  
俺お前に教えたか？

『全ターゲットスフィア、撃墜完了。お疲れ様～』

「わざわざ手伝つてもらつて悪かつたな、マリエル」

『もう思うなら後で、アンジュルグとアシュセイヴァーばらせせて  
？』

だから田をそんなにキラキラさせんな……

「別にいいけど、ちゃんと戻してくれよ？」

『それじゃ、私の部屋で検証するから移動開始～』

……ちやんと戻してくれるよね？

で、訓練施設から移動してマリホールの仕事部屋に移動。この女、自分の研究室持ってるんですよ。

何でも俺も参加する魔導師強化プロジェクトの本局側の責任者に任命されたとのことで自分のオフィスをゲットしたとのこと

「……汚い」

『これがかたずけられない女という奴でしょつか？』

そこそこの広さをもつた部屋なのが非常に汚い。

床には丸めた紙や途中まで書きあげた設計図が散乱しておりデスクにも大量の設計図と「コーヒーカップ

「あはは～昨日遅くまで仕事してて、片付けるの面倒だったもんだから

参った参ったなどといながら手早く片付け始める。

「……こいつはデバイスの基礎フレーム？」

落ちていいく設計図を拾って皿を通して

『それにしては、やけに頑丈に作ってありますね』

「いっは…なるほど。

こないだ話していたカートリッジシステム搭載予定の基礎フレームか

「何とか、軽くて丈夫、柔軟な基礎フレームにしたいんだけどこれ  
がなかなか曲者でねえ」

「また、こだわるな。」

『レドだつてアンジュルグとアシュセイヴナー作つてるとき偉いこ  
だわつてましたよ?』

確かに、設計図かなり書いてたつけ?

「やるからには完ぺきを求める、それがプロよ」

メガネを光らせて胸を張るのはいいんだが……その胸じゃなあ

### 【ゴッソリ】

「つてえなおい!—」

グーで殴られた

「今私の胸見て残念とか思つたでしょ!—?わ、私だつてまだ若いん  
だからこれからもつと大きくなるの!—」

顔真っ赤にして若干涙ぐんでも恐くないぞ〜

あとやるんなら11歳の少年じゃなくともつと大人にやつた方がいい  
いぞ〜

「へいへい。さ、データ検証始めんぞ～」

「いつか絶対、ダイナマイトボディになつて悩殺するんだから」

出来るもんならやってみろ

さて、気を取り直して本日動作検証を行つたデータを立ち上げてソファーに座つて検証開始！

「さて、まずはアンジュルグなんだけど……」

『ファンタムフェニックスの魔力ランクはAAA威力射程とともに申し分なしです。』

「問題はカートリッジ無しだとチャージ時間がかかり過ぎること…あの威力叩きだすのに必要な時間が約5分」

カートリッジ5発分で300秒ってことは1発分のチャージが約1分カートリッジ使用なら15秒くらいか？

「完全に奇襲用だね、もつあきらめてカートリッジを使えば？」

『今のレドですとカートリッジの使用をお勧めできません』

「やつぱり体にかかる負担？」

『はい、一時成長期が終わっていない状態でのカートリッジ使用は多少とはいえる影響が出でてくるはずです』

「ピンチな時の切り札ってことで使用は基本的に無しだな」

『私の許可がないと使用できなくしておきますからね！…』

「イリュージョン・アローとステインガー・アロー、シャドウランサーは特に問題なしかな？」

マリエルがアンジュルグで使用した魔法のデータを見比べる。

「だな、速度、威力ともに問題なし。」

イリュージョン・アローがAランクで劣化版ファンタムフェニックス、ステインガー・アローはBランクでステインガースナイプの改良版、シャドウランサーはフォトンランサーの応用でBランク、連射性と貫通性重視の弾幕魔法。

『そしてこちらが、動作前と動作後のアンジュルグのデータです』

「魔力素の残骸もほとんど無いし、部品の損傷もなし。しっかり馴染んでるな」

「ソフト面も術式プログラムにエラーも無いね」

アンジュルグは特に問題なしで良いのかな？

『次にアシュセイヴァーですが……これは』

「ん～ちょっとねえ」

「やつぱほあのギミックは問題があつたか……」

上から、「アリア、マリエル、俺である。

「まさかたつた一度の使用でここまで損傷するとは……」

モニターに立ち上がるのはアシュセイヴァーの動作前と後のデータ  
一だが……

動作後のデーターの至る所にダメージを受けている。

「欲張り過ぎだね、砲撃魔法と最後の斬撃魔法でオーバーホールが  
必要だよ?」

《特に最後のプレイブ拉斯ラッシュですね》

グリップとトリガーとカートリッジシステムを搭載したせいで若干  
強度に不安が残ったんだよなあ  
何とかいけると思ってたんだけど……フレームが歪むとは思わなかつ  
た。

多分このまま使い続けてれば後二、三回でぶつ壊れる。

「ううう……力作だったのに……」

グッバイ制作時間約2年  
あ、なんか目から汗が……

あちゃー、なんだか泣き出しそうなんだけど。  
あ、どうもマリエル・アテンザです。  
アシュセイヴァーの不具合のためレド君は見たことないほど凶んで  
しました。

(ちょっと、ラミア。何とかしてよ)

(無理ですよ、実際問題こういった欠陥があるのは事実なんですし)

(大事な相棒なんだから励まして)

(マリエルさん!) は年上の包容力で慰めてくださいよ

(一人じゃ無理だって、ラミアも手伝ってね)

つて、泣き出しちゃった

(う、ラミア!?)

(しようがないですねえ~)

(なんでそんなに偉そうなのかな!?)

二人揃つて「ソソソソ話す

「で、でもほら。射撃魔法と砲撃魔法は特にダメージもないし?」

『そ、そりですよ。グリップを外付けにして銃剣型にしてしまえばフレームも強化できますし?』

「ラ、ラニアの言つ通りだつて誘導制御や、魔力収束は非常にいいんだし。斬撃魔法は封印してしまえばちゃんと近接でも使えるつて!」

「……ほんと?」

涙目!?

破壊力抜群です。

『ほんとですよ?軽く計算しましたが、銃剣にしてしまえばその分フレームを強化できます。そうなればある程度は剣としても使用可能ですね。刃の部分も切れ味はいいですから、つまく改良すればブレイブスラッシュもほじ強力な斬撃魔法は打てませんがAランククラスのものならなんとかなりそうですよ?』

「私も改良手伝つてあげるから、ね?」

『マリエルさんもそり言つてますから、頑張りましょ。前例が無いフレームタイプですし不具合はどうしても起きてしまします』

「……そうだな、失敗作とも言えないし。今回は勉強させてもらつたと思つて次回に活かそう」

うとうんいつもの調子が戻ってきたみたい

やつぱりレンド君は「ひじかないと

…アシュセイバー

ディスプレイに立ち上がっているアシュセイヴァーの基礎フレーム  
設計図

損傷のためとこひこの赤くなつてゐるけで……ミシヂボットバイスと  
して使う場合を考える

カートリッジは外付けにして、周辺を補強できればベストとまでは  
いかないナビベターじゃないかな

頭の中で簡単に設計図を思い浮かべる

うん、悪くない

後は材質……コストを抑えた上に柔軟性を持たせることができれば

…

近いうちに一度資材開発部と話さないといけないかな

現状の資材でも良いけどそれ以上の物が使えるなら充分……

「レド君」

「ん? 何をマリエル?」

「アシュセイヴァーのフレーム使わせて貰つても良つかな?」

「ミラードのに使つの?」

うん、やつぱりレンド君は察しがいい。

「……別にかまわないけど、多分、柔軟性と強度足りないよ?」

『材料自体は現在使用されているものを使いましたからね』

「うん、妥協するつもりはないから大丈夫。コレを雛型として可能な限り高性能なものに仕上げたいんだ」

私は技術官だもん

簡単に妥協なんてしてやらない

目指すのは次期量産型の試作デバイス、限られたコストの中で最高のものを作り出す。

それが今の私の仕事だ

「良いね、それでこそマリエルだよ」

「ヤコと口元を綻ばせて、レド君はついせりふに笑つ

「それなら、今後も定期的に話し合つか？互いに情報交換も必要だし俺もマリエルに相談したいことがあると思つ」

「あ、いいねそれ」

「そうだな、次から奇数月はマリエルんところで偶数月は俺んところでどう?」

「OK-OK」

これが今後何年も続いていくことは私もレド君もワーファもまだ知る由もなかつた



## 第5話 ついにキタ、念願の射撃魔法（後書き）

アレ？おかしいなあ

本来チヨイ役の予定のマコエルが見事にヒロイン候補に…？

まあ、いいかわ

感想、誤字指摘等のアドバイスありましたらよろしくお願ひします

## 第6話 魔導録として技術者として

「ああ、今日も元気に頑張りましょうなーー。」

「お断りしまつすーー。」

放たれた拳を体を右に傾けることで辛ハジトヨナ…って掠つたよ！？

髪の毛がチツとかいつてはじけ飛びましたけどオホーーー！

やあ、レザーデ・ワインストンです

なんだかんだで地上本部で仕事を始めて2週間ほどたつ、今更だが俺のお仕事はミッド式カートリッジシステムの開発と魔力効率上昇の研究。

重要な事だからもう一回言ひなごと俺の仕事は研究と開発ね？

ちくしょう、何が悲しくてショーティングアーシやら模擬戦やらなきやならんのだ…しかも格上とな

そういう事の始まりは10日前…

「ほひ、よや見しちゃダメよつと」

回想は後でね！

「ハハアッーー。」

## 『Protection』

縁に輝くプロテクションが相手の拳を受け止める

「ぐぬぬぬ」

拳とバリアが拮抗しているように見えるが少しづつ拳が俺へと向かってくる…

「甘い！カートリッジロード…！」

ナックル型のデバイスが薬莢を排出してタービンが回り…

「リボルバー・マグナムッ！…」

「ゲツ！？」

即座に後ろに飛びと同時に

「トライシールド！…」

『Tri Shield』

開いている左腕にシールドを開きリボルバー・マグナムの威力を利用し更に距離を離す

向こうが態勢を立て直す前に一撃を繰り出すため飛行魔法の応用で即座に態勢を立て直し

ヴァイサーを上段から…

「『地斬…』」

振り下ろすつ…!

「『…疾空閃』」

直撃を気にせず更に

「烈火刃…！」『fire…!』

緑の刃が四種類の軌跡を描いて相手に迫り…  
着弾と同時に爆発した

「やつたか？」

集中を切らさず爆煙が少しづつ晴れる先を見る  
……しまつた…!!

『レド…』

「なんだよ…」

分かつてゐから言ひなよ？頼むから言つてくれるなよ？

『それは、相手の生存フラグをばっちり立てますよ？』

だから分かつてゐつてえの…!!

「はん、もとからアレで倒れるような人じゃねえー」

うん、ちょっとはこれで終われば良いなあ～なんて思つたけど元々あまり期待はしてなかつたから問題ない

『……ホントに?』

「ぬるぬるせいね!…つい、氣を抜いて言つかけたんだからしちゃがないじやねえか!…

「ふう~危ない危ない

煙の向こうから紫の髪をなびかせ彼女は…クイントさんは無傷で姿を現した

『どうやらギリギリで防御されてしまつたようですね』

「一発くらには通つてくれても良いじゃんかよ…」

大きく息を吐き、アイサーラガを構える

時刻はそろそろ毎…飯も食べたいし、本来の仕事もしたい

「アリア、アレでケリ着けんぞ…」

『了解』

「来なセーレンド君」

「こちらの雰囲気を感じ取ったのかクイントさんは腰を落として迎撃姿勢を取つた

「真っ向勝負……」

今の俺ができる最速の速さで、ヴァイサーがを振るい、地斬疾空閃を放つ…とヴァイサーがを前方に突き出し……爆発的に加速魔力でコートeingされた最速の突きを突き出す…！

「《風・刃・一・貫……》」

クイントさんが防御魔法を展開するが一瞬の均衡の後その防御ごとクイントさんを貫いた…

「いやあ、まさか一〇日間で一撃入れられるとはおねーわんびくつりよ」

「むしろあの一撃で直撃じゃないのがおこなわざびっくりです」

《あの一撃で倒せないレドにおかさんは驚きです》

誰がおかーさんか」「ハ

模擬戦も無事に終了して現在時刻が午後一時、ちょっと遅めの昼食中です

模擬戦の結果は俺の勝ち…試合に勝つて勝負に負けた感じだけどルールは簡単で、俺がクイントさんに一撃入れるかノックアウトされるか時間いっぱい逃げ切るかのどれかである。

「しつかし…モグモグ…普通…モグモグ…あの状態から…ングング…避けます?」

『行儀が悪いですよ?』

「ミニア、いつから俺のおかーさんになつた?」

「…アレは避けたというより逸らしたのよ」

…おお、ジーザス

なんで俺が一人前のパスタ食うより早く三人前食い終わつてのこの人?

『逸らしたですか?』

「そ、あの最後に使つた魔法…風刃一貫だっけ? あの魔法は一点突破で防御」と貫く技だよね?」

「はい」

風刃一貫はクイントさんが言つとおり、防御」と相手をぶち貫く  
刺突技

実際のところは風刃閃同様、魔力コーティングされたヴァイサー  
ガで突き刺すだけだ

カートリッジシステムを封印中の俺が考え出した苦肉の策である

『なるほど、防御魔法を半円状で展開したんですね』

「そうよん、さすがラミアちゃん。正確には展開位置を若干ずらし  
てだけどねん」

つまりこの風刃一貫は……欠陥魔法？

「着眼点は面白いからまだまだ改良の余地ありつてといふかしら」

むう……どうしたものか

「隊長に相談してみたらどう？」

「ゼスト隊長ですか？」

「そ、隊長は獲物が槍だし、いろいろ聞いてみるといいわよ」

確かにゼスト隊長のデバイスは槍型だけども……ありやどちらかといえど槍よりも青竜円月刀でしょう

「今度暇見つけて聞いてみます」

「やうしなさい」

と駄弁りながら昼食も無事に終わったのそのままクインントさんと別れて仕事に向かうわけですよ

さて、今日せどりから手づかむかね

「セヒト」

自分に『えられた研究室で食後のコーヒー・ブレイクをしつつ端末を起動させる

マリエルほど広い部屋ではないものの俺も専用の研究室が『えられたので遠慮なく我が城とさせてもらつてゐる

『試作型の図面は上がつてますけど…』

「まあ、一応ね……」

でもこれは流石に……ひどこよなあ

『とりあえず、ベルガ式のシステム適当に持つてきただけですからね』

「だよなあ

「流石にこれは無い」とはいえ、恐らくこのままでも十分使える…  
…使えるけど多分デバイスが持たないんだよね

インテリジョン・デバイスは纖細だから

「ある程度調整は必要としてやつぱつこれじや画面へないよなあ」

『カートリッジの口径を小さくしてみたんですけど…』

ふむ

小口径にすることでデバイス、術者に掛かる負担を軽減  
高火力の魔法を使う場合はカートリッジのロード回数を増やせば…

アレ?悪くないんじゃ…

となると…システム自体は、現状のベルガ式をベースに改良して、  
試作機は拳銃みたいにしてみようか…

「アリニア、口径はどれくらいが最もバランスがいい?」

『そうですね、レドが使う場合を前提として直徑0・40~0・4  
5インチが妥当では?』

「その場合のカートリッジによるブーストはどんなもんよ?」

『じぱりお待ちください』

「アが点滅すると同時に田の前の端末が動き出し計算していく

『一般武装隊員が使用するとして約1・2～1・4倍の上昇ですか、現状のベルガ式カートリッジシステムで約1・8倍であることを考えれば十分かと?』

「なるほど問題はなさそうだな……」

ん~でもこれって現状の技術で簡単にできることなんだよなあついでに効率があまり良くない…魔法を行使するたびにカートリッジをロードしてたらアツといつ間にカートリッジ切れを起こすんじゃ

「駄目だ、もう一度ゼロから考え直すぞ

そもそもカートリッジシステムの運用方法は

- ? · 魔導師の保有魔力量増加
- ? · 行使魔法の不足魔力の補填
- ? · 魔法の発動に要する魔力供給時間の短縮
- ? · 圧縮魔力を利用した魔法の行使

## の四種類

?はある魔法に必要な魔力を10としたとき、事前にカートリッジに込められた魔力を用いて9を補い残り1の魔力を行使者が供給する、というような運用法

ここにおいての1の魔力とは、魔力操作・制御のための魔力であるいわばダイナマイトの火種のようなものであり、カートリッジの含有魔力量を把握していなければ、当然魔法行使は失敗に至る魔力の扱いは相応の精密・綿密な技術が必要であり、不慣れな者がカートリッジローの度に相当の精神力、ひいては体力までも消耗することは珍しくない

?は?が魔法行使時間の延長を目的としているのに対し、より上級の魔法を扱うことに主眼を置いたといえる

高位魔法の発動に必要とされる供給魔力の不足分をカートリッジによつて補填する運用法

高位魔法の操作・制御が出来なければまず叶わない運用方法である

?はベル式魔法が近接系魔法による個人戦闘に特化していることから、長時間の詠唱やいわゆる「溜め」、広範囲に及ぶ大規模魔法などを戦闘に組み込むことが難しい

とはいえた現状のカートリッジシステムの主な運用はこれが一番多い無理やり供給時間を短縮し、魔法を発動させる運用法である

本来の過程を踏まない発動であるため魔法の精度は低下するが、近接戦闘においても隙を生じさせない魔法行使としては有力であると考えられる

?は通常の魔力出力量では発動させることの出来ない、大量の魔

力を必要とする魔法の行使を目的に運用すること

カートリッジシステムの搭載・使用を前提とした魔法の行使であり乱用出来ず、瞬間的・限定的ではあるが、通常の数倍の出力をはじき出すことを可能とする

?の運用法の発展とも言え、デバイスの高出力形態への変形などもこれに分類される

この運用方法を成立させるには、爆発的なエネルギーに耐えうる堅牢なデバイス、通常では扱わない過剰エネルギーを魔法として制御する行使者の技量が要求される

ベルカ式魔法における、正に必殺の一撃といえる。

以上の点を踏まえても、一度思案すると…

「そもそもミッド式でカートリッジシステムを用いる必要性が低い？」

『確かに現状ではミッド式でのカートリッジシステムのメリットよりもデメリットの方が大きいですね』

魔力運用技術は魔導師本人およびデバイスの処理能力を上げることである程度は対応できる

だがどちらにしてもデバイスにかかる負担が大きすぎる

運用方法をモニターに出して思案する

「……アレ？」

『どうしました？』

「「」の運用方法つてさあ、一瞬のものじゃないか？」

『どうこういふことです?』

「いやね、どの運用方法も一瞬でカートリッジに内包されてる魔力使いきつてるじゃん」

『元々がそういう目的で作られてるものですから当然ですよ』

「何だ気付いてないのか?」

「ラミアなら簡単に気付きそうなものだがまだまだ人間ほど柔軟な思考はできないみたいだな

『氣づく?』

「良いか、一瞬でカートリッジの魔力を使いきるとこ「」とで「バイス、術者に負担がかかるのはわかるな?」

『はい、だから今その負担をどうにかしようとしているのですよね?』

「そうだ、だがこれが中々難航しているわけだ

『だからこそその小口径のカートリッジではないのですか?』

「いやね、負担が軽減できないのなら負担の原因を無くしてしまえ

ばいいと思わないか？」

『まさか！？』

『やつやく俺が言いたいことに気が付いたらしく

「そ、要するに『一瞬』でカートリッジの魔力を使うから負担がかかるわけだ。なら魔力を『一定時間』かけて消費すれば良い」

『危険すぎます！！確かにその方法なら負担は少ないでしょうけど魔力制御に失敗した場合のリスクが大きすぎますよーー！』

『確かにリスクがでかいけど要是制御に失敗しなけりゃいいだけだろ』

『まったく簡単にいいますね…』

『だが、俺が思つにこの方法じゃないとおそらくミッド式でのカートリッジシステムの使用はほぼ無理だろ』

リスクは大きいけどデバイス、術者にかかる負担は制御に成功さえすれば軽いはず……失敗するとシャレにならんけども

『はあ、わかりました。言い出したら昔から聞かないんですから…』

『流石は我が相棒よく俺のことわかつてるじゃないか』

『ええ、伊達にあなたの相棒なんてやってませんからね』

とりあえずのミッド式カートリッジシステムの完成系は見えてきたあとはいかにしてそこに行くかだ

「やはり専用のプログラムが必要だよな」

『カートリッジシステム本体はある程度の改修で問題ありませんね』  
「とはいって、カートリッジ使用するたびに専用プログラム流すとかストレージじゃ難しいよなあ」

『ストレージデバイスには不向きですね、供給魔力適当量の纖細なコントロールは臨機応変に行わねばなりませんし』

さて、ここで供給魔力適当量について補足しておこうと思つ

本来魔法には供給魔力適当量というものが存在する。これに満たない魔力では十分な魔法効果が発現せず、それが過剰であっても操作や制御を失つたり、過剰魔力の無駄、最悪暴発の危険性すら孕むこととなる

よつて、余剰魔力分も効果的に発現できる術式、あるいは制御しうる術者の技量が必要不可欠となるというわけだ

何故この魔力適当量をコントロールするのにストレージが不向きかといふと

いかに専用の術式プログラムを用意したとしても術者のその日の体調、使用魔法による魔力適当量はある程度均一とはいえ若干ながらバラつきがある

一々術式プログラムをカートリッジ行使するたびに微調整していくのは非人格搭載型のストレージデバイスでは難しいのである

無論、術者にそれだけの技量があるのなら問題はない。

「でも一般局員が使用しているデバイスはストレージかあ…」

『ああ、そういえば首都防衛隊所属のミシド式魔導師もほぼ8割がストレージデバイスでしたね』

駄目じゃん

「うーむ…」

わざわざ、どうするべきか…

困ったときのマリエもんなんだが毎回あいつに相談持ちかけるのは何か負けた気がするので却下…次の定例会で話すけど

「とりあえず、ストレージデバイスとインテリジェントデバイス。それぞれ専用の物を用意するしかないな…」

『具体的な仕様はどうします?』

「ストレージデバイスに使用するものは小口径でインテリジェントデバイスは何種類か用意しておこうか…」

現状俺が求められることは管理局に所属す魔導師の戦力UPだか

ら…

「まずはストレージ用のカートリッジシステムから仕上げる。」

『よろしいのですか?』

「何がだよ？」

『ストレージのカートリッジシステムでは術者にある程度負担がか  
かってしまいますよ?』

「技術なんてもんは日々進化していくもんだぜ?」

今は無理かもしけないがこの先技術が進歩していけばより負担が  
少ないものがつくれていぐだらう」

「それには試作品なんてもんは欠陥や欠点がお約束なんだよ」

稼働データーもなしに完璧なものを作れるわけなんかないんだか  
ら…俺は過去の経験(アシュセイヴォーの不具合)から学習したんだ  
『そうですか、なら少しでもまともなものを作り上げてください。  
私も微力ながらお手伝いいたします』

「ああ、頼りにしてるぜ相棒?」

『頼られてあげましょう相棒』

それじゃ、頑張つてまともなものを作り上げましょうか…



## 第7話 クロノ襲来（前書き）

お久しぶりでござります

## 第7話 クロノ襲来

「…よ、よつやく完成した…」

実はあの後調子に乗つてストレージ用のカートリッジシステムの設計図書をあげてしましました。

一週間もかかつたがな…

「流石にまだんど寝てないと辛いもんがあつたなあ…」

一日の睡眠時間が平均して約3時間ほどで通常の業務も行いつつの一週間はすんごくハードだったな。

『だから言つたじゃないですか！－』

「やかましい、耳元で怒鳴るな…」

流石に世界が回つてこむ

「良し、今日は休む」

『いやいや、ここまで来たんだからがんばりましょうよ明日はお休みですよ?』

うん、でももう無理だから休む。

ゼスト隊長宛に今日は休むことを記したメールを送信。

カートリッジシステムの設計図をマリエルに送つておく…追伸で今

「ウシ、これで大丈夫… よし寝るぞ、まあ寝るぞ」

『まつたく… 来客や通信が来た場合はどうします？』

「ハリアが対応してくれ… 僕を起さないよ」

「うん、多分寝てる時ならだれでもひつぶち切れる自信がある

「ああ、ただスクランブルとか急ぎの用件なら起してくれ…」

ヤバい、ベットに行ぐのも面倒だ… もういいでいいか

最近お世話になつてたソフナーに寝転ぶ

「じゅ、お休み…」

『良い夢を…』

ああ～ようやく寝られる…

「お… レ 起さん… ハ」

『か……てクロ……と寝てな……んで……お……待……い……れこ』

……んあ?

この声はリリマとクロ……か?

少し……静かにしや……俺はまだ……ねむ……い

「起……。レザード……」

『ちよ、……駄目……すつて……』

……………  
プチン

「うむせえんだよお前ら人が久しぶりに熟睡してんのに何起……して  
くれてんだゴラアああ……！」

「おお、起きたかレザード聞いてくれ

「聞こえなかつたのかクロノ?」

グワアシ……

人の安眠を邪魔するKYOUの頭をアイアンクローラーで持ち上げる。

「何故に俺の安眠を妨害してるんだ?ん?……ちやんとお話をよいつや  
?」

「ぐわああー？あ、頭があああー？」

右手で掘んでるナードがメキメキと音を立てている気がするが氣のせいだらう。

『レ、レドお気持ちは察しますがその辺で…ね？』

「大丈夫だラミア、今の俺はめちゃめちゃクールだ…ああ、今ならきっと冷静さを欠くことなく敵を葬り去れるだらうさ」

体は煮えたぎるように熱いんだが心はとても落ち着いている…ああ、これが明鏡止水か…

今なら誰が相手だらうが負けることはないだらう

『お、落ち着いてくださいレド』

「何言つてゐんだラミア？今のおれはこんなに落ち着いているじゃないか…さあ、敵は目の前だぜ？…ヴァイサー・ガ・スタンバイ」

『スタンバイしちゃ駄目ですぅ！…！…！』

「ワミアの野郎勝手にロツクかけやがったなしじょうがねえなあ…試作品のアイツでいいか…

「ウエイクアップ…ダ「わ、悪かったレザード。僕の配慮が足りなかつた」…あア？

「ナードが喋つてゐるな…だが…

「おこおこ、ケーベルクロよお……それが人に謝る態度なんですかア？」

右腕の力を増す…

「ああああ……」

「おうア、人様に謝る時はなソで言つんだア？」

「……す……」  
「ませんで……」

「聞けねバズカ……三下あ？」

「すいませんでしたあ……！」

「……つたぐ」

イイ氣分で寝てたのに起こしやがつて  
目、さえちまた：コーヒーでも飲むかね

「んで、俺の久しぶりにまともな睡眠時間を奪つておいて何の用だ

？」

「コーヒーメーカーが「ポコポ」と音を立てて黒い液体がたまつていく

「あ、ああ。実はな……」

クロノの手のひらには身分印…

「へえ、ついに受かつたのか…おめでとう」

そこには【執務官】文字があった

「それでだ、早速君を僕の補佐としてスカウトに来た」

「ふむ…」

無造作にクロノの襟をつかみ

「帰れ」

笑顔で部屋の外に放り出した

「ハハア、俺が寝てる間になんか連絡とかなかつたか？」

《マリエルさんから感謝のメールが来てたくらいですね》

わざわざ、そなことしてこなくともいいのに変なところでまめな奴だなあ…

「ほかに」「つて、なんでいきなり部屋の外に出すんだ…」…はあ  
…」

しつけんな

「良いが、クロノ。俺はお前の補佐官やるなんて言ったことは一つもない」

「S2Cの面倒を見てくれるんじゃないのか…?」

…もしかしてクロノの脳内では【俺がS2Cの面倒を見る=クロノの補佐】とかいう公式が成り立つてんのではなかろつか？

「デバイスの整備は俺がやつてやるが、お前の面倒まで見るつもりはないからな？」

「だが断る！！」

「ふざけんな！！俺はデバイスマイスターなの！！前線に出張つてヒヤツハーとかするつもりはないの！」

「却下だ。僕はレドと一緒に仕事がしたい！」

「その気持ちは嬉しいけどな、俺執務官補佐資格持つてないからな？」

「よし、じゃあ、今から取りに行こ！」

「もう今期の試験終わってんのだよ…」

『ちよっと二人とも落ち着いてください…話脱線しますよ?』

クロノが相手だとどうも売り言葉に買い言葉になるな  
む、いかんいかん

『はあ、状況をまとめますからね?』

「何故お前が進行役？」

『まとめますからね?』

「イエス、マム」

恐いぞリハビト

『まづクロノさんほレドを自分の補佐官にしたい、レドはクロノさんの補佐官をやるつもつはない。ここまでは良いですね?』

「そうだ」

「うむ」

『で、現状レドは補佐官の資格を持つていないのでクロノさんの要望は通らないのはわかりますね?』

「ああ

『さらに言えば現在レドは技術士官として地上本部の首都防衛隊に所属していることもあります、仮に補佐資格を持っていたとしてもすぐにつぶにかならないのはわかりますね?』

「聞いてないぞレド……」

「お前が執務官試験近かつたからあえて伝えてなかつたんだよ……」

『人の話を聞きなさい!』

「イエス、マム」

デバイスのくせに人の話とか… 《レド?》

「ナンデモナイヨー」

《「コホン、話を戻しますが。レドは現在技術部からの依頼により研究から手が離せません》

「ああ、まだ2・3年はかかるな…」

《では、じつしましよう。これから模擬戦を行いましょう》

「模擬戦?」

《ええ、この模擬戦にレドが勝てばクロノさんはあきらめる。クロノさんが勝てばレドは今の研究が終わり次第クロノさんの補佐官になる》

うーん、一応日々しきかれてるから体はなまつてないしクロノにはまだアシュセイヴァーとアンジュルグ見せてないから勝率は悪くないんだが…

「僕はそれでもかまわないが?」

ちらりと横目でクロノをみると自信満々なご様子。

なるほどねえ…今までの戦績から十分勝てると予測してるわけか。

「黙り込んでじつしたんだレド?…まさか自信がないのか?」

オーケー、オーケー

クールに行こう。

これはクロノの挑発だ、俺は勝てる戦いしかしない男だ。ニヤリと勝ち誇った顔がムカつくが言わせておけばいい

「まつたく、しばらく会わない間にすいぶんとヘタレになつたな、君は…」

落ちつけ俺、横でヤレヤレなんて言つてやがるがこれはクロノの挑発だ。

俺の方が一回り以上年上（精神的に）なんだからこゝは大人な対応を…

「まあ、所詮君は『バイスマイスター』で僕は執務官。結果は見えてるからしょうがないか」

プツチン

『あ、切れましたね』

「上等だこのチビ、誰に喧嘩売つたかわからせてやる

「ふん、君こそ僕に勝てると思つてているのか？」

「そつちこそこ油断してたとか言わせんから覚えておけよ

『では、日時と場所はどうします？』

「本局の訓練施設を抑えておこう」

『時間は？』

「明日、15時でどうだ？」

「ああ、それでかまわない」

『ルールはどうします?』

「時間無制限一本勝負……勝敗はどうやら氣絶するか負けを認めるまでいいな?」

「いいね、どうせなりとこせやうじやないのよ」

「じゃ、今日のところはそれで帰るよ」

「ね、首洗つて待つてやがれ」

トントン拍子で話が決まりクロノはそのままへと出て行った。

「……やつらまたあ……」

〇一〇の状態で安易な挑発に乗つてしまつたこと今更ながら後悔である。

『まあ、早い段階で白黒はつきつとせなこからさうなるんですよ~』

「白業自得つてか?」

さて、こつなかつたからこそ明日は絶対に負けられないわけだが……

「ラニア、現状でクロノとやり合つて俺の勝率は？」

『良くて8割です。クイントさんやゼスト隊長との模擬戦でレドも強くなつてゐるとは言えクロノさんも執務官試験に合格しているといつことですから実力は上がつてゐると思われます』

「……となると厳しく見て5割つてところか…」

はあ…

「ラニア、カートリッジシステムのプロテクト外せ」

『却下です』

「良いから明日だけでもいいからハ・ズ・セ」

『ダ・メ・デ・ス』

「俺は明日の勝負負けるわけにはいかないの、分の悪いかけは嫌いなの！！」

『まだ15歳になつてないから駄目です！！』

「明日だけでいいから」

お願いしますラニア様

『…………はあ、言いだすと聞かないんですから。アンジュルグ、ヴァイサー、アシュセイヴアードそれぞれマガジンずつです』

「もう一声」

『駄目です、1マガジンだけです。それ以上の使用はリンクアーコアと肉体に負担が大きいから駄目です』

使えるのはそれぞれ5・4・8発ずつか…ヴァイサー・ガはともかく他の2機はカートリッジ使わないと火力不足

アンジュルグは特に燃費が悪い…

基本はやはりヴァイサー・ガによるクロスレンジで戦うしかない…がクロノはそこを読んで俺を近づけようとしないだろうなあ魔力量は俺の方が多いけどその分俺の方が燃費悪いし…

「さて、どうしたものか…」

結局夜までいろいろと考えつつ模擬戦の当面を迎えた



## 第7話 クロノ襲来（後書き）

感想・アドバイスお待ちしています

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3827/>

---

魔法少女リリカルなのは～目指せデバイスマスター～

2011年12月21日11時48分発行